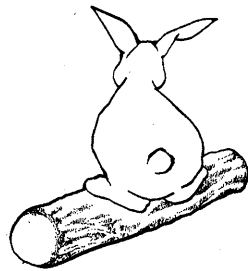


## ポーランドの虹

松井 とし



ワルシャワ郊外にあるシヨパンの生家を訪ねる途中、大地から高い空に向かって立ち昇る虹を見た。それはこれまでに見たこともないほど、色鮮やかな、太くて力強い虹だった。昨秋、ポーランドの学校を尋ねる機会に恵まれた。侵略により世界地図から何度も国名が消されたポーランド。首都ワルシャワから南へ三〇〇キロメートル程の古都クラクフは、中世のたたずまいを今に残す美しい町だった。郊外にあるアウシュビッツ収容所では、犠牲になった人たちの髪の毛、靴、メガネ等がうず高く積まれた展示の中に、小ぶりのケースに納められた乳幼児の小さな靴や手編のケープ等がひっそりと置かれていた。夕闇が刻々と迫る中をビルケナウ収容所にも立ち寄り。一〇〇メートル毎に整然と立てられた威圧的な監視塔が広い敷地を取り囲み、引き込み線の二本のレールが遙かかなたの黒い森まで続いている。役に立たない子どもと老人は、即、森の奥に運ばれたという。コル

チャック先生と子どもたちも、貨車に乗せられこのレールの上を通ったのだろう。

一夜明けて学校訪問の朝は、明るくさわやかだった。迎えてくれた子どもたちの瞳もキラキラと輝き、口々に「ジェンドブリー」。参観した授業は、いずれも先生の熱意と子どもたちの意欲に満ちていて、言葉の分からない私たちをも強く引き付ける興味深いものだった。

六年生の図工の授業で一人の女の子とのふれあいがあった。ブラックの絵を思い出させる静物を描く授業であったが、後ろからみると、その子は紙の上にたまった絵の具を一心にティッシュで拭き取っている。遠い昔の体験が急に懐かしく蘇ってきた。まわりの友だちの出来ばえも気になるようすで落ち着かない。授業の最後に絵が友達にプレゼントされることになったが、目が合う人がいないのか彼女は絵を持ったまま立ち尽くしている。「私にいただける?」、そっと肩を叩くと、振り向いた顔がパッと明るくなった。席に戻ってからまわりの友だちに「私の絵、あの人にあげたの」と言っているのか、こぼれるような笑顔が何度も振り向いた。子どもたちと共に在る時、傍らのおとなも言葉の壁を越えて微笑み、共感し合うことができる。子どもたちの無垢な笑顔は「われら地球人」と語りかけているようだった。変化の時にあるポーランドだが、あの大きな虹と子どもたちのすばらしい笑顔が、これからの国づくりを象徴しているように思われた。(元幼稚園教諭)